ZOOスポット ㊴

動物園というと，動物とともに思い浮かぶのは檻ではないでしょうか。その動物の檻等に関わった仕事をしているMさんに，スポットを当ててみました。

Mさんは，もともと電気工事の免許をもっていましたが，動物園では，檻等の改修や製作には溶接の技術が必要でした。当時48才だったので，溶接の免許をとるためには，大変な努力が必要です。試験に受かるために，猛勉強をしました。今となっては，各動物舎担当者の希望どおりに経済的に製作できるようになったので，思い切って挑戦してみて本当に良かったと思うそうです。１つの檻を作るのに１カ月ほどかかることもありますが，もともと手先を使う仕事には興味があったので，完成した時には充実感でいっぱいになります。

ゴミ箱にふたがなかった時，カラスによる被害には目に余るものがあったので，ふたを付けることを思い付き，取り組んでみました。すると，カラスによる害も減少し，職員や園内にある食堂の人たちにも大変感謝され，非常に嬉しかったそうです。そのアイデアや効果が京都市にも認められ市長より賞状をいただく結果になりました。自分からもやるべきことを見つけだすのも楽しいことだとつくづく感じたそうです。

自分がした仕事が園内に残り続けていくことや，製作した後感謝してもらえることが仕事への情熱の支えです。最初は溶接という仕事には興味がなかったけれど，責任感から始めたことが仕事に対する充実感に変わっていったことを聞いて，いろんなことに「チャレンジ」してみることの大切さを痛感しました。

園内集音マイク No. 35

園内の動物の世話をする飼育係は，動物の担当が決まっています。担当が変わる時，動物がさまざまな反応を表すことがあります。アカゲザルの担当は，10月より男性（Ｓさん）から女性（Ｎさん）に変わったので，お二人にマイクを向けてみました。

アカゲザルは，Ｓさんに対しては一目置いていて，自分達より強い人という認識をしています。エサを与えるとオスのNo.1のショータロー等は，近付いてこないそうです。ところが，Ｎさんに対しては，まだ，位置づけがはっきりせず，様子をうかがっていて，なめているようなところがあるそうです。Ｎさんがエサを与えると、ショータローでさえ近付いてくるそうです。また、獣医師は治療や予防接種をする人というイメージがあり，緊張したりこわがったりする様子が見られるとのことです。

Ｓさんは，アカゲザルの担当を５年間受け持ちました。中でも子供たち同志で遊ぶときの様子が１番興味深いそうです。子供たちは，同年齢同志で遊ぶことが多く，生後５～６か月の子ザルはかたまって一緒に遊びます。１才くらいまでは水遊びも大好きで，泳いだり，もぐったり，飛び込んだりする様子はいつまで見ていてもあきません。かなり高いところからでも飛び込むこともあります。

Ｎさんは，担当になってから日も浅いので，個体を見分けるために特徴を把握するのも課題でした。顔，尾の長さ，毛の色，しぐさなどを手がかりに名前を覚えました。親子関係等も把握できたところなので，群れの中でのサル同志のつながりや力関係等もわかるようになると，もっとおもしろいでしょうとのことでした。

お二人とも，アカゲザルの飼育にあたっては，えさの食べ具合や健康には一番気を使うそうです。繁殖期に近づくとメス同志のトラブル等もあり，闘争もおこりやすいのでけがには特に気をつけています。

皆さんへのお願いは，サル島の中に物を投げ込まないで欲しいということです。また，靴や帽子，遠足のプリントや地図等をうっかり落とさないようにして欲しいそうです。アカゲザルは，いろんな物に興味や関心を示すので，中には食べてしまい体調をくずす原因になることさえあります。

■第108号の発行は平成11年４月29日㈭の予定です。
■定期購読を希望される方は、80円切手４枚（１年分）を同封して京都市動物園までお申込み下さい。

動物園だより　No.107
発行所　京都市動物園
京都市左京区岡崎法勝寺町　TEL. 075（771）0210

文化市民局動物園　京都市印刷物 第100736号